

第7回 水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会
議事概要

1. 開催日時及び開催場所

日時：平成28年1月25日（月）15:00～17:30

場所：MIRRORビル5F Gocai（ゴカイ）

2. 出席コメンテーター

- ・別紙の通り

3. 議事の内容

- （1）水辺とまちに関する最近の動向
- （2）各地のミズベリングの取組紹介（4事例）
- （3）意見交換

（1）水辺とまちに関する最近の動向

①国土交通省取組状況報告

- 〇〇：・国土交通省の施策として、今回の「水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会」、2月16日の「かわまちづくり」全国会議、3日3日の「ミズベリングJAPAN」まで、「三段式ロケット」と呼ぶイベントを実施する。
- ・今後は、河口から上流までどんな水辺であってもこの河川環境課が窓口となり、場合によっては水管理・国土保全局だけではなく、都市局や住宅局等の他部署とも調整しながら、魅力的な水辺づくりについて最大限手伝っていく。
 - ・全国35箇所でもミズベリング会議が開催され、3月3日には、この35箇所の各箇所での取組みについてPRを含めてご紹介できるようにしたい。
 - ・ミズベリングとは、まちの空間で日常的な生活や経済活動を営みながら、身近にある川をほとんど意識していない人々あるいは民間企業に対し、川の外から改めて川の価値を見出す機会を提供し、身近なニューフロンティアとしての川を生かし、多様な主体が相互に連携することで新たなソーシャルデザインを生み出しながら

全国各地の水辺から地域活性化を実現しようとする活動であり、国土交通省はミズベリングを支援する「第一のサポーター」であることを宣言する。

- ・国土交通省はミズベリングの活動を通じて市町村や住民、民間企業が進めようとする多種多様な水辺の取組みに対して相談に乗り、ともに課題の解決に努め、より一層水辺を通じ地域の魅力を高めたい人々の思いをつなげ、アイデアを実現させるための協働プレーヤー、コーディネーター、ファシリテーターとなる。そして今後もミズベリングが発展、継続、定着するために、ミズベリングに賛同する方々とともにミズベリングの活動を支えていく。

〇〇：・今の宣言を聞いて、驚き、感動して、時代がここまで来たなど、これは我々も頑張らなければいけないと本当に思う。すばらしい宣言である。ミズベリングの第一のサポーターとして本当に頑張っていて一緒にやっていただければと思う。

②ミズベリング事務局取組状況報告

- ・ミズベリングプロジェクト事務局より、全国各地でのミズベリング会議の開催状況とメディアや民間企業の関心の高まりについて報告が行われた。

〇〇：・実は最初は、2013年の11月にここでみんなで飲もうぜと言ったのが始まり。こんな景色のいいところで酒を飲んだらうまいじゃないか、こんな店もあるじゃないか、まちができてるじゃないか、みんなで集まろうじゃないか、と。水辺の話は水辺でしましょう、なぜなら水辺でやれば人の心は開いてオープンになって、ざっくばらんに語れるようになる。何かそういう場ができますよ、っていうのがミズベリングソーシャルデザイン懇談会の始まりだったような感じ。それが何となく多くの人たちにとって、大事なビジネスであるとか、行政手法であるとか、いろいろなことを積極的に変化させようという流れに結びついてきたことに、とても感慨深い思いである。

- ・ミズベリングは、最初はこちらが情報を提供するという感じだったのが、今では各地で活躍してる人、俺に話をさせてくれというような積極的な人がどんどん集まってくる。各地のミズベリングに行くと、俺のことを知らないのかみたいな人が立ち上がってくる。そういう人たちと我々はつながった。1が2になり、3になり、今日のように中央の人と地方の人がつながるサイクルが生まれ、台風のような。今では、ミズベリングは誰かが中心というわけではなく、日本全国の大きな渦巻きになって

いる感じがする。

- ・振り返ってみると、2014年3月に隅田川沿いのすみだリバーサイドホールで水辺について自由に話そう、というテーマでミズベリング東京会議が行われたときには、「本当に自由に語っていいのか」という雰囲気があった。今では考えられないけれど、当時は（行政の方も）自由に市民と対話なんかしたら大変なことになってしまうという空気があったようだ。
- ・でも、ミズベリングの会議を各地で開いて、創造的に水辺についてしゃべろうよ、ソーシャルデザインを考えよう、とワークショップをしてみると、国内外から100人を超える参加者があった。みんな、あれやりたい、これやりたい、と出てくる。水辺についてみんな熱意を持っていろいろなことをしゃべるんだ、ということを初めて実感した。自由なアイデアを出し合って、絵を描いてみたり。今までは、そういう場がなかった。わずか2年で状況は大きく変わったと思う。
- ・その次に、川を活かしたまちづくりをやろうという話になった。まちづくりで世界一の場所を探したら、ポートランドが全米で最も住みたいまちに選ばれていることがわかった。それなら、水辺とまちについて、ポートランドの関係者とミーティングをしたらどうだろう、と考えて「ミズベリングインスパイア・フォーラム2015」を企画、開催した。ポートランドからはまちづくりの専門家に来ていただいて、会議には300人が参加した。
- ・そこで感じたのは、川がまちづくりととても密接な関係にあること。ポートランドも格好いいけれど、水辺そのものが格好いい、という解釈が生まれた。
- ・堂園さんの話にあったように、4月時点で26箇所で開催された会議は、各地で様々な形で行われ、今では35箇所を数えるまでになっている。
- ・昨年7月7日は、「水辺で乾杯」という企画をやった。自分のふるさとの水辺、自慢したい水辺で乾杯して、写真撮って事務局に送ってください、というもの。予算もかかっていない。約165箇所から写真が送られてきて、延べ3,000人が乾杯した。その日に初めて会う人たちが乾杯してつながっていく。開催後に大手ビール会社から連絡が来た。今年の7月には何かしらのアクションがあるはず。
- ・その勢いに乗って、10月には「ミズベリング世界会議」を大阪で開催した。大阪の水辺は、世界の中でもすごいということを、皆に伝えるために、パリ、バンコク、サンアントニオからも都市計画の専門家を招いて先進事例を通して、活動や事業を

支える仕組みや民間活力の導入手法などについて意見交換を行った。大阪の堂島では、全長12メートルのアヒルを浮かべ、シンボルが生まれた。全国からミズベリングのプレーヤーたちが大集合した。3日間で延1,200人の参加者があり、水辺関連のイベントとしては、国内最大級だと思う。

- ・このときに、「ミズベリング」 という愛言葉が誕生した。
- ・企業との連携も進んでいる。JRや三越で、ミズベリングポップアップストアを3日間限定でオープンさせた。
- ・大阪での世界会議に合わせて、学芸出版から『都市を変える水辺アクション』という本を出版した。『東京大改造マップ』の水辺の再生に関する特集のなかで、水辺の再生マップがとりあげられ、ミズベリング事務局もインタビューを受けた。
- ・そういう流れの中で水辺に対する内外の関心が高まっている。今日のソーシャルデザイン会議も関心を持つ人びとが集まる場のひとつ。水辺には、人を素直にさせたり、正直にさせたりする力がある。市民の一人一人の水辺への思いが、今大きな流れになっており、それが3月3日、ミズベリングJAPANで渋谷のヒカリエに集まる。
- ・ミズベリングJAPANでは、流通系とか開発系とかいろいろな人たちが集まる。ここでは公共空間活用の新しいマーケティングの領域、河川行政のマネジメントの新たな転換などについて、何か新しい手法を模索していきたい。水辺にはどんな曲や歌、服がぴったりくるのか、水辺を歩くときはどのくらいの歩幅で歩くのが格好いいのか、といった「東京リバーサイドライフスタイル」なるもの、「カルチャー」が今年の春に流行ると思う。実は既に雑誌社、テレビ局数社から取材依頼が来ている。確実に今年の春から夏に向かってそういったトレンドが来る。
- ・将来的には、ミズベリングの第三者機関のようなものをつくりたい、と構想し始めている。公共空間の活用を民間と連携して進めていきたい。特に東京では、オリンピック・パラリンピックに向けて、世界に誇れる日本を打ち出していくことや、また忘れかけていた資産としての川を活かそうという機運がある。
- ・個人的には、今年、水辺の三大価値転換が起こると考えている。「水辺の話をするとう陽気になる」、「水辺でまちに色気が出る」、そして「水辺が人気になる」という転換。3月3日の「ミズベリング世界会議」には、ぜひおいでいただき、新しい時代の風景を一緒に眺めていただきたい。

〇〇：・今ご紹介があった大阪の世界大会には、私も参加した。日本全国、世界各地からたくさんの方々が集まった。それぞれのスピーカーの前に全部マイクがあり、周りの方々はチャンネルを選びながら議論に参加できるという、すごい仕掛けだった。

・大阪には水辺にちゃんと展覧会や展示やイベントや議論ができる大きい空間がある。「男女夏7人物語」というドラマは、80年代前半の東京ウォーターフロントブームの火つけ役になった。沈んでいた機運が、今再び浮上してきているので、メディアや音楽関係者を巻き込み、協力していけば、東京の水辺再生の第2フェーズ、第3フェーズにつながると思う。

(2) 各地のミズベリングの取組紹介

・一人7分の発表の後、一人8分の質疑応答を行った。

① 「グローバルなリバー・ビジネスへの挑戦」

(福井県越前市：環境文化研究所、(株)田中地質コンサルタント 田中謙次)

田中：・少子化・定住化対策に向けた「田舎」ならではの民間主導のリバービジネスについて、福井県越前市の例を紹介する。

- ・福井県は、地域番付では各項目で45位、46位の低位置につけることが多い。水辺という環境を基盤にしたビジネスで利益を上げることで、少子化、定住化対策につながることを目的としている。
- ・平成20年頃から現在の活動の構想を描いており、平成23年の河川敷地占用許可準則の改正を受けて、平成24年から本格的に活動を開始した。
- ・日野川の河川敷に訪れた外国人を対象に、理想の水辺像に関するアンケートを実施した。彼らの母国では、水辺は散歩や釣り、スポーツを楽しむ空間として利用され、川沿いにはバーがあるという。日本の川に対しては、友達や家族と一緒に楽しめるバーベキュー施設の整備が望まれるとの回答があった。
- ・期間限定の水辺のバー「おしゃれなり・BAR」(2012年からスタート、8月の3日間開催、日野川河川緑地公園)を開催した。利益に結びけるにはまだまだ課題はあるがバーを訪れた川沿いの住民から「こんな魅力があったことに初めて気づいた」との反応を引き出したことは成果だった。

- ・市役所との連携もうまく取れていると感じる。市役所側から「何かすることはないか」という申し出があり、制度や予算上、自分たちでは関与できない部分を補ってもらっている。その一つに、20メートル級のテント用アンカーの設置がある。小さい工事だが、行政と協働した取組という点で大きな一歩だと思う。
- ・「福井県都デザイン戦略」にも、足羽川の水辺や緑をまちづくりに生かす方針が盛り込まれている。県の戦略と水辺でのイベント企画は調和的であり、県に対しても協働の提案をしていきたい。
- ・独自に活動を続けているなかで、「ミズベリング」が始まった。国土交通省の担当者と話してみると、自分たちと同じような目線で活動していることがわかった。教えてください、一緒にやりましょうということで、2015年3月12日の「ミズベリング・越前若狭会議」開催につながった。
- ・その後も、日野川、足羽川など各河川の流域単位で「ミッション会議」を開き、課題や新たな企画に関する意見の交換や共有を進めている。
- ・ミッション会議で挙げられたアイデアで、かたちになったのが「Coffee Wine Bar 川TERRACE」（2015年11月の5日間、足羽川）だった。足羽川沿いの石畳やガス灯を活かして、おしゃれな雰囲気を出せないかを考えた結果、テラスを設置しよう、ワインバーをやろう、ということになった。福井県の大型酒類販売店の賛同もあった。5日間で400人が来訪した。
- ・いつもの空間がちょっとした演出で、非日常の空間に変化する。「こんなところなら毎週来たい」という声をいただいた。
- ・それをみて市役所からも「何か手伝えることはあるか」という話があった。実際、4月から毎週川テラスをやるという方向に動いている。4月には桜の名所百選にも選ばれている足羽川の桜の並木沿いで開催する予定。地元企業からは、大きな企画を開催したいという申し出があった。
- ・ビジネスは1社だけが儲けるのではない。様々なビジネスと協力しながら、若い人たちが挑戦できる場をつくっていくことを考えている。そういった意味で少子化・定住化対策に取り組む。これは田舎だからこそできること。行政と楽しく協力できるのも、「田舎ならではの」と感じる。
- ・平成28年は少しでも利益につながって、「よし！、これ何かおもしろそうなビジネスだから、俺ちょっとやってみるよ」という若者を増やしていきたい。越前市出身

でもそうでなくてもいい。まずは、一人から、一家族から、そういう人の輪を育てていきたい。

〇〇：・水辺の魅力を考えるとき、やはり夜も欠かせない。真っ暗になったところにちょっと光がともって、そこでワインやお酒を楽しむ。これは日本が昔から育んできた文化で、今までの水辺再生の中で足りなかったこと。ビジネスとして成り立たせていくことも視野に入れた素晴らしいお話だった。

<質疑応答>

〇〇：・テント用アンカーの設置はどのようなプロセスで進めたのか。詳細を知りたい。

〇〇：・設置場所は、県が管轄する河川区域内の公園利用区間。実行委員会が市へ提案し、市が県と交渉した。アンカーの設計は、私たちが無料で行い、工事費は市の予算から出してもらった。全部で16箇所完成した。

〇〇：・川TERRACEは今後継続していく予定か。

〇〇：・浜町の料亭を中心に協議会を結成し定期的に開催する予定。

〇〇：・陸上交通、公共交通ともうまく連携していけたらいいと思う。

〇〇：・確かにそう思う。実は川TERRACEは電車が見えるところ。ちょうどボジョレヌーボーの解禁の時期だったので、ソムリエも呼び、電車を見ながら、水辺でワインを楽しんだ。その様子がYahoo!ニュースになり、記事を読んで訪れた人も多かった。

②「ミズベリング横浜西口会議の取組み」

(神奈川県横浜市：(株)相鉄アーバンクリエイツ横浜駅西口事業部 鳥畑智紀)

鳥畑：・商店街と自治体、相鉄が連携した横浜西口元気プロジェクト(エリアマネジメント)

の一環として、都市河川の水辺を生かしたまちづくりを紹介する。

・相鉄アーバンクリエイツという会社では、活気のあるまちをつくることを目的に、横浜西口元気プロジェクトを立ち上げ、エリアマネジメントを行なっている。また、多様な活動主体をつなげる役割も果たしている。

・元気プロジェクトは2014年6月に立ち上げられた。この2年間で横浜西口夏まつりや、バレンタインやハロウィーンのイベントも地域の方々と連携しながら実施している。各イベントと連動してスタンプラリーを企画し、西口エリアでの回遊性を高める工夫もしている。

・元気プロジェクトというプラットフォームを使って、ミズベリングの活動を継続しつ

つ、地域の資源である河川を活用してまちの魅力を高めていきたい。

- ・帷子川の水辺が活動の舞台。昭和40年代にはアユの生息が確認されたが、その後見られなくなっていた。それが、平成19年以降に再び確認されるようになったことから、横浜市の行政もアユが遡上する帷子川にしていこうと、動き出している。川を活用したまちおこしという点で、行政と協働していける可能性を感じている。
- ・ミズベリング会議は、合計4回開催している。0回、1回、2回、3回という数え方をしている。初回は、2014年12月に開催し、約40名が集まり、会議室で国交省の担当者にミズベリングの活動に関する講演をしていただいた。
- ・2015年4月に第1回、約70名の方にお集まりいただいて、この横浜西口の川を使って何かいいことできないかというようなことを自由に討議した。そのときに出てきたアイデアを冊子にまとめ、いろいろなところに配布し、活動の周知を図っている。桜の観賞、防災訓練、ごみ拾い、水辺でライブ、カフェなどのアイデアが挙げられた。
- ・第2回の会議では、現地を実際に歩いて問題点を見つけ出した。約2時間川沿いを歩き、その後会議を開いて、イベントやアクティビティを具体的に構想した。実際、これがアウトプットとして昨年の夏祭りに活かされた。ミズベリングとはもともとは関係がなかったイベントであったが、メガSUPやE-BOATの体験コーナーを設けて、道行く人々にお声がけしなら参加者を募った結果、多くの方の参加を得られた。参加者からは、新たな発見があったというコメントをいただいた。横浜は夜の時間帯も町に人が出ているので、SUPヨガやイルミネーションSUPという夜のイベントも企画した。
- ・夏まつりのときに開催したミニ水族館という企画は、子どもたちが非常に興味を示してくれた。その日の早朝に帷子川からとってきた生き物を展示して、ミニ水族館をつくった。魚が棲んでいると思っていなかったが、様々な種類の魚がいることがわかった。地域の方々にも、この川が身近な存在であることを、感じていただけたのではないと思う。
- ・今後は、「グリーンリバープロジェクト」の推進や、まちづくりに取組む人びとの交流の場「横浜西口フューチャーセンター（仮称）」を設立し、まちの課題解決に努める予定である。グリーンリバープロジェクトとは、人びとと生き物の水をそれぞれきれいにしていこう、グリーンにしていこうという活動。グリーンというのはエコや有機的な、サステナブルな、といった意味合い。またフューチャーセンターとは、みんながまちをよくする、活性化するために自由に議論できる拠点のことである。

・現状の課題は4つある。1つは川が汚れているということ。CODの値としてはそれほど高くないが、見た目が緑っぽくて汚いこと、都市河川なので雨の後が少し汚い。2つ目が氾濫危険性の高さ。平成16年にも洪水した川であり、県の治水事務所でも利用のための許認可が出しづらいということであった。3つ目は参加メンバーの広がり不足。会議の回を重ねるにつれ、参加人数も減っている。ロコミでは限界があるため、何かいいやり方がないか思案している。最後は具体策へのスピードが遅いこと。取り組む時間のかけ方にも当然寄ってきてしまうので反省するところ。鉄道が見えるところでバーをやりたいという提案をしたが、許認可上、認められないということで却下された経緯がある。皆さんからアドバイスをいただきたい。

<質疑応答>

- 〇〇：・大阪の道頓堀もエリアマネジメントで活性化した。電鉄会社の関連があることは地域にとっても大きい可能性があると思う。普段はどのような部署に所属されている社員の方が、エリアマネジメントを担当しているのか。
- 〇〇：・会社は都市開発の会社で、オフィスや商業施設などを開発している。開発といっても横浜駅西口を全て建て替えるわけではなく、エリマネ活動もあわせて行なっている。
- 〇〇：・公的空間のエリマネは、収支を同じにするのは大変なことである。維持管理に必要な確実な収入源が基盤にないと事業として成り立たせるのは難しい。
- 〇〇：・単独で経営していくのは相当厳しい。相鉄グループでは、決して少なくない資金を投入して地域活性化に取り組んでいるため、今後は、少しでもその投入額を減らしていきたい。札幌や浜松の事例では、大分収入が増えているという話を聞いている。可能性は十分にあると感じている。
- 〇〇：・1箇所ずつの開発では、応援し合う仕組みが整いにくく、また各場所の開発の段階によって、支援の方法も変わってくる。全体をつなぎとめて、エリアマネジメントを進めていく仕組みをつくっていくことが大切だと思う。横浜西口の取組は、それができる仕組みになっている。
- ・公共空間でのビジネスも、営業年度を少し長目にとって、償却できるようなしくみが整うよう、規制緩和が進むことを望んでいる。公共空間でのビジネスには、大きな可能性が眠っている。
- 〇〇：・外部のコンサルタントに期待することは何か。

〇〇：・自分たちだけでは、水辺の活用や他地域での取組に関する情報が十分とは言い難いし、人的なつながりもまだ足りない。それを補ってくれる存在として、また、今後、エリアマネジメント活動の裾野を共に広げていく仲間として、外部のコンサルタントには期待を寄せている。

② 「ミズベリング近江八幡・西の湖活用の取組み」

(滋賀県近江八幡市：(株) まっせ 田口真太郎)

田口：・合併後の二地域（旧安土町、旧近江八幡市）をつなぐ観光まちづくりと、今まさに議論の最中にある西の湖活用の現状と今後の展望を紹介する。

- ・近江八幡も人口が減少してきており、今後まちのあり方をどうするかといった議論の中で、この西の湖活用に今まさに話し合っている。
- ・近江八幡市は琵琶湖の中央に位置している。信長の安土城があった安土山で、こちらには豊臣秀次が築城した八幡山城のちょうど間に囲まれた場所が西の湖というおもしろい土地になっている。この場所は、文化的価値が認められ、重要文化的景観の第1号に選定されている。また、ラムサール条約の登録湿地として2010年に拡大登録され、昨年には日本遺産にも登録された。
- ・地理的な特徴としては、戦後に干拓事業を経て、琵琶湖周辺に数多くあった内湖のうち、約7割が干拓され、田んぼ等に整備された。干拓の過程で、調整池として残されたのが西の湖だった。西の湖は、生物多様性ということで注目されている。また、琵琶湖に入る前の田んぼの泥水のバッファゾーンとして機能しており、堆積した泥による栄養分でヨシが発育し、それを刈り取って産業になる、という人と自然の関わり合いを象徴する場所である。
- ・琵琶湖の湖上の交通の発展により、経済的に繁栄したまちが近江八幡。近江商人の活躍も知られる。歴史的な街道もたくさん通っており、朝鮮と江戸を結んだ朝鮮通信使の街道、中山道、伊勢と琵琶湖を結んだ八風街道というような主要な街道がある。その沿道に有形・無形の文化が数多く残っている。
- ・西の湖は生物の宝庫かつ、重要文化的景観「近江八幡の水郷」を有する。
- ・100年近く行政上区切られていた。2010年3月の平成の大合併の最後に合併した土地。西の湖は分断された。細かく言うと分断されたこのエリアだけが重要文化的景観に選定されている。合併後にこの西の湖を活用して安土と八幡をつなぐまちづくりを

- していこうということで、懇話会、委員会といろいろなことが動いていく中で、新しい組織が必要となり、「まちづくり会社まっせ」が設立されたという経緯がある。西の湖の活用に関しては、本当にまだここ5年ぐらいの活動で、今議論を重ねている。
- ・民間主導のまちづくりは半世紀続くが、それは八幡堀周辺の出来事。昭和40年代から八幡堀を市民が主体となって守っていこうということで、保存活動が行われ、今では年間300万人の人のびとが訪れる観光地に成長している。
 - ・一方、西の湖周辺の水辺空間は、ほとんど活用されてこなかった。
 - ・課題は、合併後の地域をつなぐ観光まちづくり。水郷めぐりが1つの基盤産業としてあるが、担い手が高齢化しており、また後継者も育っていない。サイクリングロードもあるが、活用している様子は見たことがない。
 - ・従来の人と自然の関係性そのものが今変わってきているなかで、新しい時代の地域モデルをつくっていくことがミッションとしてある。
 - ・自然の再生と継承をはかりながら、諸大学と連携したアートイベントの開催や八幡山の景観整備プロジェクトを実施予定。
 - ・地域の課題として、まちづくりを議論する場がない、ということがある。今後の取組みとして、これまで関わっていた大学の先生方に協力いただいて、定期的に議論する場をつくろうということで、未来づくりキャンパスを始めている。
 - ・西の湖には、日本一のヨシの産業があったが、人の手が加わっていないため、荒れてしまっている。学生の力を借りて、整備を進めていこうとしている。例えば、構造力学の先生と組んで、「ヨシドーム」のような仮設建築をつくることができないかを検証している。
 - ・近隣の芸術大学と組んで、アートプロジェクトも実施している。これまで、西の湖ヨシを使ったヨシ灯り展や、ヨシで約15メートルの日本一高い松明をつくり、松明祭を行なった。
 - ・西の湖周辺でも、伝統的建造物群保存地区には、田舟が浮かぶ昔ながらの景観がまだ残っている。八幡山と西の湖周辺は重要文化的景観に指定されているが、竹林が荒廃したり、看板も増えて、景観が大分崩れてきている。景観をきちんと守ろうということで地元の企業や、京都大学の「森里海連環学教育ユニット」との連携、ボランティアであったり行政と組んで長期的なプロジェクトを立ち上げようという動きをしているところである。

＜質疑応答＞

- 〇〇：・文化的景観は、今世界でものすごく重要なポジションを占めている。日本でもそれが広がってきたが、その第1号が近江八幡。これをどういうふうに育てて、もっと人が来て注目されて元気が出るようになるかという大きな課題取り組んでいらっしゃるのがよくわかった。八幡堀との関係、つながりはどうなっているのか。八幡堀を訪れる観光客は西の湖周辺には来ないのか。あるいは、船で往来することはできないのか。
- 〇〇：・干拓以前や、琵琶湖総合開発によって琵琶湖の水位が下がる前は、八幡堀と西の湖周辺は運河網でつながっていたが、今は八幡堀と西の湖周辺が、別々に水郷めぐりを実施している。少し途切れた関係にある。
- 〇〇：・ヨシを使った産業は、今はほとんど行われていないと思うが、技術を伝えていらっしゃる方はいるのか。
- 〇〇：・ヨシ業者で今残っているのは3社ある。ちょうど2カ月前にヒアリングさせてもらって、1社は葦葺きをされている。全国には、寺院の屋根など葦葺きのところも多いが、葦葺きは人手もかかり、やっているところが全国でもここしかない。だから逆に、若い一級建築士を持っている方々が学びに来ている。一方で、従来からの葦簀や葦製品をつくっている方が2人、70歳、80歳の方がいるが、生計が成り立たないから若い人たちには伝承したくない、自分の代で終わらせると言っておられる。難しい状況だなと感じる。
- 〇〇：・「株式会社まっせ」という組織はどのような人たちの集まりなのか。
- 〇〇：・近江八幡市、近江八幡商工会議所、観光協会、滋賀銀行等及びその関係役員の方々、大学関係者が加わってくれている。自分たちの会社で考えたことを、皆で一つになってやっていくぞ、という組織体制になっている。

③ 「ミズベリング×おくいずも女子旅つくる!委員会」

(島根県雲南市：雲南市産業振興部商工観光課 鈴木佑里子)

鈴木：・雲南市・飯南町・奥出雲町のJA・商工会・行政の女性職員による地域の魅力発信の取組を紹介する。

・「おくいずも女子旅つくる!委員会」は、雲南市、飯南町、奥出雲町という1市2町のJAと商工会、行政の女性職員10名で構成したチーム。メンバーは皆地元が大好きで、

地元の良さを少しでも多くの方々に知っていただきたい、という思いで活動している。

- 活動の一つに、『Okutabi』（奥出雲の旅=Okutabi）という無料情報誌の発行がある。女性目線の切り口から地元を紹介し、女性の旅を応援する活動をしている。
- 無料冊子「女子百花」では、奥出雲エリアで製作されたものを取り上げ、その作り手と、東京で愛用している使い手のそれぞれに取材をし、ものを通じた女性の交流を記事にしている。
- 主に女性をターゲットに、奥出雲エリアを知ってもらう取組を県外で展開している。コンセプトは、「乗られるものには何でも乗っかろう」ということ。POLA化粧品が、毎年美肌県グランプリを開催している。島根県は4年連続グランプリに輝いたということで、そのネタを取り上げて、自分たちの観光情報ブースに、POLAの美容部員を招いて、来場者にハンドマッサージを受けていただく企画も実施した。
- 自分たちの活動は一貫して地域の魅力を伝えること。モニターツアーで桜染め職人のもとを訪れ、桜染め体験をしたり、マイ箸づくりなど、地域の人と一緒に地域の魅力を発信するという活動をしている。
- 身近な水辺は、まちの中心を流れている一級河川の斐伊川。ヤマタノオロチ伝説の舞台で、河川敷にはおよそ2キロに及ぶ桜並木が続いている。その川に架かる橋が舞台となった映画が数年前に作られ、映画の中で「願い橋」と名付けられた。その願い橋と川沿いの桜並木の風景がカメラスポットになっている。
- この水辺で実施した活動に、願い橋でひげダンスを踊って動画を撮影する、ということがあった。子どもから年配の方まで約140人が平日の夕方にも関わらず集まって、ダンスを踊ってくれた。
- 2015年7月7日には、斐伊川沿いで「水辺で乾杯」を実施した。乾杯後、JR木次駅周辺の飲食店で参加者が2次会を楽しんだということで、地域の方々にも喜んでいただいた。
- 尾原ダムでヨガを企画し、市内や雲南圏域外から約20人が参加した。また、ダム湖上でSUPをして、そのSUPの上でお茶を飲む、しかも浴衣を着てというハードルの高いイベントも実施した。企画した自分たちもとても楽しかった。このときの様子をプロのカメラマンに撮影していただき、フォトブックにして皆さんのお土産にした。
- ダムはエンターテインメント施設だと実感した。広島的女子大生ツアーを実施した

ときには、参加者は終始、大喜びしながらダムの写真撮影していた。

・斐伊川という川は、本当に身近な存在。「水辺を楽しむ」ということをテーマに活動しているつもりはないが、どうしても「何かしようかな」と思うと、そこに水辺がある。他の発表者の方とは逆の発想かもしれないが、地域を楽しむということは水辺を楽しむことにつながっていると感じる。

・大人がこの地域を楽しんでいることを伝えることで、楽しそうな大人たちの姿を見て、子どもたちがこの地域にまた誇りを持つことにつながってくれば良いという想いで活動をしている。

＜質疑応答＞

〇〇：・モニターツアーなどの活動は定期的実施しているのか。

〇〇：・なかなか継続していかない。モニターツアーは補助金で実施した。交通のアクセスが悪い奥まった土地であるがゆえに、スポット同士も離れている。車での移動距離も長いため、なかなか事業者に取り上げていただけていない。

〇〇：・墨田区の場合は、女子会やるときには、メンバーの中にJTＢの課長や、生活雑誌の編集長を入れていた。そうすると、彼らが事業になる活動を実施してくれる。メンバーに事業者を加えたら良いかもしれない。

〇〇：・最近の地域活性化のキーワードは「ゆるさ」だと感じている。自分たちも楽しみながら人を楽しませる。一般に、行政の方は、何かやろうとすると目標を立てなければいけない。そうすると、その目標のために頑張らなくちゃいけない、という悲壮感が漂ってきて、そこに楽しみに行こうと思う人がしんどくなる。「ゆるい」ことがうまくいく、という成功例に思える。そういう意味で期待している。

〇〇：・私自身も、行政という看板と、行政でできないことを「おおいずも女子旅つくる！委員会」でやるという使い分けをしている。今はありがたい立場で活動させてもらっている。

(3) 意見交換

・忽那氏より、ミズベリング世界会議（2015年10月9日）の実施概要、得られた知見について報告が行われた。

・井出氏より、水辺の楽しさや高揚感は「水際（エッジ）」にあるとの指摘がなされた。今後は、「水の上」に出る面白さも伝えていきたいとし、2月開催のマリン・グ

ランピングを紹介された。

・9名のコメンテーターより、様々な観点からの意見が述べられた。

〇〇：・実は東京にはいろいろな水辺がある。飯田橋とか市ヶ谷付近には、外堀がある。法政大学の本校や飯田橋校がある辺り。シンポジウムをやった後に見学会をしたこともある。あそこの土手に皆で入って、コメンテーターの伊藤先生にリーダーシップをとっていただいて、ピクニックを計画したこともある。外堀通り沿いの土手に入って釣りをやったり、いろいろなイベントをしたら、鉄道から見えて、効果があるだろうと思ったから。でもその頃から、立入禁止の札がどんどん出てきて、入ってはいけないのだそうですね。やはり外堀で何かをするのは難しいのでしょうか。

〇〇：・ピクニックの相談も受けていて、ぜひやりたいと思ったが、傾斜があって難しい。何か傾斜でもピクニックができるポータブルのピクニック用品があったら、ぜひやりたい。

〇〇：・外堀沿いには、意外に不思議なオープンスペースがあるが、入りにくい、または鍵がかかっている入れない。眠っている意味ある空間を発見し、価値を見出し、もっと開かれた空間にしていけそうな場所が、東京都心でもたくさんあると思う。

〇〇：・水辺の楽しさは、やっぱり「水際（エッジ）」ですよ。水際ぎりぎりに行くことの楽しさに気がついてしまうと、もう止められない。僕は水辺の楽しさは水際にあることに、もっと焦点を当ててもいいのではないかと思う。

〇〇：・ミズベリングは、住民・民間・行政のアイディアマンが集まり、自然の空間を使うアクションである。大型のマスタープランを持ち、財界の資金を投入する欧米型の都市づくりとは違う日本的なものだと思う。今後世界に発信していけると思う。

・今日は本当に素敵な4つの事例の紹介があった。それぞれ、組織やイニシアチブのあり方、場所の持っている性格も違う中で、今の日本の水辺を考える上で非常に示唆的な報告だった。

・雲南市のダムの事例は、無機的な造形物に人を組み合わせることで、ハードのインフラの意味づけが変わることが発見だった。発信された写真や映像も画になる。

・西の湖は、ベネチアのラグーンのように、エコツーリズムやアグリツーリズムの

拠点になるかもしれない。また、横浜は「都心型ミズベリング」の事例となる。

- 〇〇：・我々は東京と大阪でミズベリングの超解説的なプロジェクトを実施しているが、知らない人たちも多い。実際に水際を利用する港湾や船関係の人たちに水辺の利活用について話を持ちかけても、よく知らないので中々きめられない。それは単に知らないだけということかもしれない。ミズベリング関係者のような利活用に対する感覚がある人たちが、知らない人達にアクセスするということも重要だと思う。人が変わらないと水辺が全然ミズベリングにならない。どうやってプロモートするか、知らない人に知ってもらうという工夫が必要と思う。
- 〇〇：・もう一つご報告したいのは、東京証券取引所のある兜町の日証館という建物。日本橋川沿いに建つ昭和初期の建築物で、建物の所有者自らが、川沿いの立地を活かした水辺空間の利用に関心を持って動き始めている。日証館や水辺の建物を使って、今日のようなシンポジウムを開催する、そういう拠点を確実に増やしていきたい。そうすれば自分たちの水辺への思いは、もっともっとこの川べりに住んでいる人たちにも伝わっていくのではないかと思う。それについてはどうでしょうか。
- 〇〇：・地域の観光マネジメント組織の中に、水辺活用の専門部門を設置したり、水辺の会議室やホールを検索、貸出しできるしくみを整えてはどうか。
- ・「水辺で乾杯」のような、皆が共感・参加しやすいイベントを定期開催したらどうか。
- 〇〇：・個人や民間は、河川管理者が許可しない理由や、困っている点についてじっくり話を聞き、民間がフォローできることや管理者側のメリットを提示することができれば、行政もその提案に乗りやすい側面もある。
- ・自然環境系を保護するとなると、やはりビジネスにはなりにくいと思う。商売が成立する特定のエリアを切り売りするのではなく、包括してマネジメントすることがポイント。例えば、利益が出る場所に、利益が出にくい場所を合わせたエリア設定を行ってフォローするなど。
- ・帷子川の例でも、治水上と言われるんですけど、そこも何か踏み込んで聞かれたらいいと思う。どういうことを民がやればオーケーしてくれるのかっていうところ、何を困っているのか聞かないといけないのではないか。
- 〇〇：・今のお話のとおり、我々はただ単にこの入り口の部分だけでやってもだめなので、会議に治水の方も来ていただいて、これからの活動を市民の方に伝えていただ

くことをしていきたい。我々も清掃活動を積極的に行うなどしていきたい。そうすることで我々のやりたいことも理解していただけると思う。

〇〇：・水辺を楽しんでしまおうという心意気に感銘を受けた。振り返って東京はというと、隅田川のカミソリ堤防の耐震対策の一環として、護岸を整備し、その上をテラスとして活用する隅田川テラスが、ようやくできてきた。川におしりを向けた町から、川に視線が向く町へ、まちづくりを進めたい。

・難しいのは、隣りあうビルでもオーナーの意向が異なること。普段、一般の視線がない川側から一般の視線が来ることになるため、すぐには「いいよ」とは言っていない。エリア全体で合意が得られるようにしたい。皆さんから叱咤激励いただきながら、東京の水辺を賑わいのある、楽しい空間にしていきたい。

〇〇：・堤防の内側にできたプロムナードでは、ルールを守れば、バーベキューのような活動も可能なのか。

〇〇：・管理をしつつ、バーベキューなどのイベントをやっていきましょうということは、一応実験的にはやっている。どこを歩道にして、どこをイベント用に使っているかを積み重ねていながら、賑わいの場をつくっていきたい。

〇〇：・これまでの行政と民間の関係を考え直す方が良いと思った。今まで民間は「使わせてください」というスタンスだった。それを、「こういう理由で使わせられないんだよ」という悩みとして行政が出して、対応策を民間が提示してはどうか。同じ立ち位置で一緒に考えていくことで、状況が変わると思う。

〇〇：・冒頭でご紹介があったミズベリングに対する国交省のスタンスの中に、「ミズベリングの第一のサポーターである」とあるが、すごい。サポーターということと支援ということがある。一番最後は支えていくということで、中央省庁がここまで、皆さんをお支えしますと言っているというのは革命的なことだと思って驚いている。

〇〇：・スタンスはちょっとまだ行政的には堅い言葉になっていますので、これをもっともっと柔らかい言葉にしながら、今日のご議論も踏まえて、3月3日に「ミズベリング宣言」というものにつなげていきたい。記者発表は今日が初めてだが、ミズベリングを自主的に支援している全国の地方整備局の河川部には、この12月の時点で全部アナウンスしている。いきなり言葉だけがポンと出てきても、魂が入らないので、その助走は既に12月から始めている。

- 〇〇：・管理者としては、個人や民間が直接提案に来て、許可しにくい。協議会や福井の例のようなコーディネーターとなる「あいだ」のプレーヤーや、公的な組織に入っていると、許可を出しやすいと思う。
- 〇〇：・ぜひミズベリングと隅田川ルネサンスの活動を何か結びつけるようなそういう仕掛けとかチャレンジも、隅田川でやったらどうかなというのを今急に思いついたが、どうか。
- 〇〇：・バーベキューなどのイベントも、区や観光協会を經由していただくと許可しやすい。“かわてらす”も拡大をはかっているんで、ミズベリング会議ができるようになれば良いと思う。
- 〇〇：・2年間で35箇所の会議が開かれる一方で、ミズベリングの取組があまり知られていない所もあり、いかに広めていくかがこれからの課題。
- ・アクティビティは「消えもの」なので、写真や映像で瞬間を切り取り、残し、発信することが必要。奥出雲のように、人と環境が写真に写し出されると、地域や水辺の魅力が増す。魅力的な写真を撮ってアピールすることが重要。
 - ・もちろん舟運も魅力的なので、将来的には舟で乗り付けられたらいいと思う。
 - ・陸上交通との連携が必要。アクセスのしやすさという面の他に、車窓から水辺の活動が「見える」、人から「見られる」ことが人と水辺との接点を生み出す面もある。
 - ・水辺の魅力にまだ気づいていない人の日常生活のなかに、いかに水辺を「可視化」していけるか。この課題と一緒に取り組んでいきたい。
- 〇〇：・大阪では、舟運を始めようという話がでたとき、まず舟が立ち寄る拠点を陸側につくることからスタートした。今では拠点も増えてきたので、来年はそれらを舟運でつなぐことを目標にしている。
- ・コミュニティサイクルの社会実験も実施した。舟運とコミュニティサイクルをつなぐしくみを提案していきたい。
 - ・公共空間では、まちづくり関連の組織や企業が、マーケットや各種イベントを開催している。そのイベントの日に合わせて、去年の10月頃、企画船を出してみると、非常に多くの人に乗ってくれた。船に乗るハードルを下げるために企画船の運航は有効かもしれない。
 - ・公共空間を使えるようにするために、一番最初にとった方法がゲリラテクニク。鍵がかかっている、川に近づけない場所の鍵を開けてもらうよう交渉するとこ

ろから始まり、大阪商工会議所と一緒に1週間いろいろな人と使われていない橋のもとでピクニックをした。最初は全然知られていない活動だったが、次第に認知されるようになり、水都大阪のお祭りにまでつながった。国や河川管理者の方からも、公共空間の利用について、民間やNPOなどに積極的に問い、運用を任せてみてよいかもかもしれない。これまでのような入札方式による人の選び方、組織の選び方だけでは、アイデアが埋もれてしまうおそれがある。

〇〇：・今年は水面での活動の楽しさを伝えつつ、ミズベリングがさらに広がるよう取り組んでいきたい。さらに船に乗って水面に出ることでも、見える景色は全く違う。それが自分にとっても発見につながる。自分は、小さなプロジェクトを積み重ねていくことで、ミズベリングが広がるよう働きかけていきたい。

〇〇：・問題がまたクリアになったし、やるべき方向もさらにシャープになった。何よりも国交省が第一のサポーターで支えてくださるし、行政の中にも理解して推進してくださる方が増えている状況がある。我々も、実績を積み上げていき、制度やルールを変える動きにつなげていきたい。3月3日のミズベリングJAPANは、その集大成の1つになることを期待している。

以上

「水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会」

コメンテーターリスト

	氏名	所属	出欠
座長	陣内 秀信 <small>じんない ひでのぶ</small>	法政大学デザイン工学部建築学科教授	○
コメンテーター	井出 玄一 <small>いで げんいち</small>	一般社団法人ポート・ピープル・アソシエーション代表理事	○
〃	伊藤 香織 <small>いとう かおり</small>	東京理科大学理工学部建築学科教授	○
〃	金井 つかさ <small>かない つかさ</small>	三井住友信託銀行株式会社経営企画部理事・CSR担当部長	○
〃	岸井 隆幸 <small>きしい たかゆき</small>	日本大学理工学部土木工学科教授	×
〃	忽那 ひろき <small>くつな ひろき</small>	株式会社E-DESIGN代表取締役	○
〃	久米 信行 <small>くめ のぶゆき</small>	久米繊維工業株式会社取締役会長	○
〃	紫牟田 伸子 <small>しむた のぶこ</small>	紫牟田伸子事務所代表	×
〃	吉村 庄平 <small>よしむら しょうへい</small>	大阪府都市整備部長 (代理：藁田博行 河川環境課長)	○
〃	辻田 昌弘 <small>つじた まさひろ</small>	東京大学公共政策大学院特任教授	○
〃	三浦 隆 <small>みうら たかし</small>	東京都建設局河川部長	○